

## 『虞美人草』から再発見 *Junko Higasa 2013.9.22*

ある時先生に質問する、漱石が言葉の裏側に含ませていることについて。そして教えていただき納得して疑問は解消される。けれど家に帰って神経が漱石から離れると、ビクッと来て突如別の側面が出現する。それは無意識に自分が捉えていたものの具象化現象だ。それを文章にしてみる。ところが書いている途中で内容が意識の制御を超えて別方向へ進んで行き、出来上がった文章にまたビクッとする。

またある時、自分が書いた文章を読み返していて突如ビクッと来た。「甲野さんは漱石で、宗近君は子規ではないか？」そこから思考は次の言葉を発する。<考えても行動しないタイプの漱石、考える前に行動するタイプの子規> 『虞美人草』の背景を見れば、漱石の健康を心配した鏡子夫人が津田清楓に頼んで京都旅行に同行してもらった図が浮かび上がるが、状況と人物が合致しているとは限らない。漱石はそれぞれの作品中で、親交のある人々をモデルにしているが、その作中人物に注がれる眼差しに浮かぶ漱石の優しさや孤独という内面は様々な色彩を提示する。漱石の小説には実に多くのものが詰まっている。

そして K 先生の **method of teaching** に感謝する。「成程」という出来上がった答えをくれる先生は多い。けれど素材を与えて発想力を鍛えてくれる教師は稀だ。解釈する力の育成。それは物を作り出す喜びに通じる。物が解れば『虞美人草』の良さも判る。『虞美人草』は世間で言うほど難しくも軽くもない。